

品するといふ大規模なものであったが、美術の部門はあまり振わず、日本画で平福百穂の「鴨」（六曲半双）が、西洋画で新帰朝者太田喜二郎の「赤い日傘」、彫刻で同じく新帰朝者水谷鉄也の「スペインの踊子」などが注目されただけであった。本校としては教育芸芸館に校名額一、敷地建物平面図一、校舎および各教室写真十一を出陳した。

### ③ 校舎改築工事落成（口絵図1、図2参照）

明治四十年度に着工した本校の改築工事は大正三年三月三十一日を以て落成を告げ、同年四月二日の開校満二十五年記念式において落成式と一般への披露が行われた。本工事は文部省建築課が直接計画監督したものであり、落成式において柴垣文部省建築課長は工事の概要を次のように報告した。

本日東京美術学校改築工事の落成式を挙げらるゝに際し、工事施行の顛末を報告するは、小官の光榮是に過ぎざるところなり。抑本工事は、明治四十年より四十三年に至る繼續事業として豫算を公布せられ、豫算額を參拾壹萬六千八百貳拾圓と定められたり。然るに明治四十四年二月火災の爲め、更に拾壹萬七千九百九拾圓を追加し、總豫算額を四拾參萬六千八百拾圓と改定し、繼續年限を大正二年度まで延長せられたり。右豫算額中より、設備費及事務費を控除するときは、建築費豫算額は參拾四萬八千四百五拾九圓八拾錢なり。

本工事は、明治四拾年七月着手し、工藝部校舎の建築を終り、

美術部校舎の建築中、舊校舎の本館を焼失せしため、全然設計を變更するの已むを得ざるに至り、且事業繰延の爲め繼續年限を延長せられ、前後七年の歲月を経て、本年三月三十一日を以て全く竣功を告ぐるに至れり。其建築せし建物は、煉瓦造二階建百拾五坪、木造二階建一千三百六十二坪、同平家建七百八拾八坪にして、其一坪當りの工費は、美術部本館木造二階建貳百貳拾壹圓、同部校舎煉瓦造二階建貳百九拾貳圓、木造二階建百參拾八圓、工藝部本館及校舎木造二階建百六拾圓に相當し、又建築費の總決算額は、參拾四萬八千四百五拾參圓八拾壹錢なり。

本工事は、文部技師久留正道氏建築課長として専ら其衝に當りしに明治四十四年十一月病氣の爲め退官し、小官其後任を命ぜらる。

文部技官鳥海他郎氏は、當初より工事の設計及監督に従事し、又其設計に付ては、本校教授大澤三之助、古宇田實、兩氏の援助を受けたるもの少からず。

前述の如く工事の施行七箇年の久しきに亘りたるため、最初竣功せし建物の如きは、既に修繕を要するに至りたる個所少からざるは、落成式の舉行に際し、洵に遺憾に堪えざるところなり。

（『東京美術学校校友会月報』第十三卷第五号、開校満二十五年紀念号）

この大規模な改築工事の結果、構内の様相は一変し、研究、教育設備は以前より遙かに充実したもとなつた。この改築を可能にしたのは明治四十一年三月に帝國図書館の土地三七〇〇坪および煉瓦

造二棟、木造一棟が本校所管となったためであるが、その代わりに本校敷地に公園から桜木町へ抜ける道路が新設され、敷地が二分されたかたちとなった。恐らく今日のように車の往來の激しい世の中になるとは当時の関係者は誰も予想できなかったたのであろう。

工事はまず旧帝国図書館敷地に洋風木造二階建て校舎二棟（工芸部校舎と化学室）を築造することとし、四十一年工事に着手し、四十二年五月完成して図案、金工、鑄造、漆工の諸科が工芸部校舎に引き移り、また、化学室も新築教室に移った。図画師範科は本館二階に教室があったため、四十四年の火災で大きな損害を受けたが、その後、工芸部校舎二階へ移った。次いで四十二年に撃剣柔術道場が新築され、四十三年五月に木造二階建本館（いわゆる美術部校舎）の工事に着手し、大正二年三月落成した。さらに、本館の横に煉瓦造二階建一棟（はじめ講義室。のちに図案科第二部（建築裝飾）教室となる。）その他が建設され、大正三年三月に至り、工事が終了した。

美術部校舎は平面図が田の字型の木造二階建て、後の部分は日本画、西洋画、彫刻の三科の教室とし、前面に当たる一棟は旧校舎本館を移し改築して事務室や教室、講堂に充てる計画であった。しかし、後の部分は四十四年二月に大半落成したが、同年同月、旧校舎本館の方は焼失してしまったため、改めて予算を請求して新築したのであった。前記報告に、火災によって全然設計を変更せざるを得なくなったとあるのはこの新築した一棟のことであるが、設計図（『東京美術学校校友会月報』第八卷第八号）と完成した建物とを比べてみると、外観に関しては設計の変更はなかったように見える。

この校舎は昭和四十七年に取り毀され、今ではその玄関部分が移

築保存されているのみであるが、完成当時は和洋折衷の新建築として注目を集めたもので、次のように紹介されている。

#### 本校新築校舎挿畫の畧解

東京美術學校校舎の中、所謂美術部なる日本畫、西洋畫、彫刻の三科の教室は、去る明治四十四年の二月に、大半は落成したので、同年同月の火災後は、引續いて之を使用して授業し來つたのであるが、其正面となるべき玄関付の一棟は、今回漸く竣工して、去る三月より使用することとなり、校長室、各事務室、各教室も之れで悉く配置を終つたのである。即ち此建築の全體を平圖にて眺めれば、丁度「田」の字の形をして居る二階造である。そこで今度竣工した玄関付の一棟は、即本校々舎正面の全體で、本紙中に挿入したやうな形であつて、和洋折衷の建築である。

初め正木〔直彦〕學校長は、本校の建築に方つては、せめて玄関付の一棟だけでも、幾分本邦建築の特色を見せたいといふ考で、明治四十三年の二月に職員中に改築商議委員といふものが公然設けられ、高村〔光雲〕、岩村〔透〕、福井〔信之進〕、和田〔英作〕、大澤〔三之助〕、古宇田〔実〕の諸教授が之に任命されて、種々協議を凝らした結果、古くは奈良朝風から其後のものを斟酌し、洋風建築をも加味した一種明治式とでもいふべきものを作らんとして案を立て、畧圖を作つて、之を文部省へ申請して、愈此案に依つて建築することになつたのである。そこで同省建築課の鳥海〔他郎〕技師監督の下で、明治四十五年の春から建築に取掛つて、今年の三月全く工を竣つたのである。

今その構造の大略を説明すれば、先づ正面玄關の馬車廻しは、三段の石段で、其上に建てられたのは、家根は入母屋造りで、柱は中膨れの奈良朝風丸柱八本、之に虹梁を架し、繪様木鼻をつけ、裏股の中へは竹内〔久〕教授の彫刻に成れる、極彩色の浪模様を組合した寶草華を嵌め込み、裏股の上には雲形肋木がある。丸柱の上は斗を組むで雲形肋木で虹梁を受け、垂木は角、天井は格天井で、悉く樺製素地のまゝである。突當りの處の丸柱の間三ヶ所には樺素地の唐戸（觀音開き六枚）を付し、之より内部は檜素地作りでは是亦格天井である。斯ういふ作りであるから玄關はなか／＼凝つたもので、また人目を惹くのである。學校の建築としては他に比類を見ないといふても過言であるまい。

さて又間取りを陳ぶれば、此新築一棟の階下は、玄關より左は、順次に教務掛室、庶務掛室、校長室、講義室といふ譯で、右の方は應接室から、階段を挟んで會計掛室と彫刻科標本室とである。此階段がまた日本風で、親柱には鑄銅の擬寶珠を装ひ、勾欄が付いてゐる樺製である。之を登れば會計室の上が西洋畫教官室と、其隣りが同科の教室である。階段左側の一室（即玄關上）は床に深綠色のリノリウムを敷きつめ、是亦一切檜素地作り、日本風を主とした室で、折上げ格天井である。其隣りが日本畫教官室と同科教室である。

本校の新築校舎は以上の如くであつて、其坪數は二百廿坪、構造は、一口にいへば和洋折衷といふのであるが、玄關などは全く日本風である。數へて見ると明治二十二年の二月から、教育博物館の立退跡全部を本校として授業を始めてから、丁度二十五年目

で斯の如き新築が出来たのである。

〔東京美術学校校友会月報〕第十二卷第一号

#### 新建築印象記（八）黒田鵬心

##### 東京美術學校本館

東京美術學校の敷地は、上野公園の道路改正の豫定は、現在の表門から裏門までくの字形の道路がつく事になった。其の結果學校の敷地は道路の爲めに二分せられ、舊本館は移轉せなければならなくなつた。そこで現在の本館の後部を先づ作り、其の前に舊本館を改造して附ける計畫が出来た。然るに四十四年二月舊本館は火を失し焼けて了つたので、當時建築中であつた現在の本館後部の工を急ぎ、四十四年三月竣工した。而して一方では其の前に附けるべき舊本館が焼失したので、全然新しい建物を附けるやう設計し、四十五年五月起工し、大正二年一月竣工した。本文はこの最も新しい部分を主題として草せられたものである。

焼けた舊本館を改造するのと違つて、全然新築するのであるから設計は自由に出来た譯である。直接の設計者は文部技師工學士鳥海他郎氏であるが、大體の考は正木〔直彦〕校長の頭から出たものである。又別に學校に於いて新築に關する委員が出来、古宇田、高村、岩村、福井、和田の諸氏がこれを囑托せられ、種々研究の上、先づ古宇田實氏が二百分一のスケッチ、デザインを作り、それが可いとなつて鳥海氏の手に移つた譯である。だから大體の格好、各室の配置等は委員主として古宇田氏の手になつたのであるが、細部は勿論、現場に當つては全然鳥海氏の設計になる

ものである。

總二階建て、坪数は二百廿一坪五、外に玄關八坪、工費は約六萬圓、全部木造で、車寄が石造の壇になつてゐるのと、外壁の下に少し煉瓦が用ひてある位のものである。屋根は二階及玄關は瓦葺、一階は銅板を張つてある、玄關丈けが本瓦葺で、他は棧瓦葺、瓦は參河製である。

正面の立<sup>エレベーション</sup>面は、先づ中央に大きな入母屋造があり左右に切妻造が延びて兩端が又入母屋造となつてゐる。但し左右は破風の方を正面に見せてゐる。それから中央に玄關をつけ、正面に破風を持つた屋根にしてある。全體の格好は中央の大きな入母屋造で先づ全體を統一し、左右均齊<sup>シムドリック</sup>に左右に延び、左右は破風を見せ、中央の前にも破風をつけた所は相當に變化もあり、各部の釣合もよく、大體成功したと云つてよからう。殊に軒の出が比較的深いのはいゝ印象を與へ、軒の反りも適度である。

それから特に見るべきものは玄關である、前面に四本の可なり太い圓柱を並べ、其圓柱には少許のエンタシスをつけ、柱脚には石造の蓮瓣を附し、上には三斗の組物を用ひてゐるが、大斗には皿板を有し、實肘木は雲形をしてゐる。虹梁には袖切を施し、其の鼻を繰つてある。又虹梁の上には裏股をつけ、股の内には牡丹唐草の彫刻（竹内久一氏作）を附けてある。而して此四本の柱は開放しとなし、其奥に又四本の柱を並べそれに戸がついて居り、其天井は格天井となつてゐる。この玄關の立<sup>エレベーション</sup>面、細部共に大體非難すべき點なく、柱は少し細すぎるかと思ふがエンタシスが面白く、樺の地色と木理とが如何にも美しい。又裏股の曲線もよし、

組物の形も悪くないが、虹梁の袖切が少し目立ちすぎるのと、裏股内の彫刻丈け彩色を施したのが、全體さつぱりした木の素地の色と調和してゐないのが小缺點かと思ふ。

平面は玄關を入つて、眞直と左右とに廊下があり、右手にはちぎに階段があり、上ると左右に廊下が延び、中央には手前に來賓室、奥に講堂を配置し、左右の廊下は何れも後部に折れて、舊館〔明治四十四年落成部分〕と接合し更らに後部を廻り、講堂を四方からとり圍み、四方から講堂に入れる様になつてゐる。

講堂は長方形で、柱によつて前後二部に分たれ、宛も寺の内陣、外陣の觀をなしてゐる。今假りに内外陣の稱を用ふると、外陣は全部一つの折上格天井で、内陣は更に三部に分たれ、三つが別々に折上格天井になり、外陣よりは少し細くなつてゐる。又柱頭には三斗組があり、柱間には虹梁をわたし、それに繪様、線形を施し、更に大瓶束をつけてある。而して之れ等の柱、虹梁、束、組物、格縁、窓枠等はすべて濃い代赭色に塗つてあるので、其表現は玄關などと違つて稍重くるしく、寺臭いところもある。之は余の趣味からは素地のまゝがよかつたと思ふ。重い感じの割に卑しく安っぽい感じもする。猶内陣中央は一壇高くなつてゐて、それに勾欄がつく様になつてゐるのだ相である、愈々本尊が必要となる譯だ。猶講堂の細部を見ると、中間の柱は角柱で、禪宗風の柱礎を有し、戸、窓の下には格狭間を附してあるし、數百の机にも格狭間の透しがあり、日本風の金具が附けてある。

來賓室も折上天井であるが、總檜材の素地の儘で、別に裝飾はなく、さつぱりして上品である。次に見るべき所は、玄關の右手

を上る勾欄式の階段で、其の親柱には唐金の擬寶珠がつけてある。

此の建築を様式の方から見ると、大體は和洋折衷であるが、外の格好は寧ろ日本風である、即ち屋根は殆んど日本風で、壁、窓等が西洋風になつてゐる。内部は寧ろ西洋風であるが、廊下の上の方に出てゐる肘木とか、階段の勾欄とか、又講堂、來賓室等は日本風である。殊に玄關は日本風が主である。併しこれらの日本風たるや、細部についてみると殆んど各時代の特色を持つてゐる。先づ柱にエンタシスのある事や、肘木の雲形なのは飛鳥時代、玄關の柱脚にある蓮瓣は藤原時代、勾欄の擬寶珠、講堂の柱脚は鎌倉時代、殊に柱脚は禪宗風を帶び、虹梁の袖切や、大瓶束は天竺様である。又墓股の彫刻は桃山時代或は徳川時代の特色を持つてゐる。かく數へ來ると、殆んど各時代の特色を各所に供へ、一口に日本風と云つても、何時代の様式だときめる事は出来ない。云はゞ各時代の特色を各所に配した一種新しい綜合的様式である。而して其の多種多様な特色は、まづ大體に於いて大なる破綻なく綜合調和されてゐるやうである。

斯る折衷式、寧ろ日本風を主とした公共建築は明治の初年から少しづつ試みられてゐる。余の記憶に浮び來るものを擧げて、長野學士の奈良縣廳、關野博士の奈良縣物産陳列場、武田學士の勸業銀行等がやゝ古く、近頃に至つては歌舞伎座、白木屋、泰文社等がある。併しこの主義の建築は何れかと云へば物ずきにやつたもので、眞面目に研究して、此の系統を發展させやうと考へた事はないらしく、従つて數も少なく發達もしなかつた、若しもう

少し眞面目に此の主義に没頭する建築家があつたらもつと發達したに違ひない。しかも建築の性質と位置とによつては、かゝる様式のものも頗る面白いと思ふ。余は泰文社については建築の性質としてはいゝが、位置の上からは許せないと云つたが、美術學校の場合は、建築の性質からも位置からも十分許せると思ふ。否な木造とするならば、最も面白い様式の撰擇であつたと信ずる。しかも從來これ程各時代の特色を集め、それが破綻なく調和して、一種の新しい表現を作つたものは無かつた。一つの細部を離して見れば飛鳥とか藤原とか古いものでも、かく一緒に集めた時は一種新しい感じが出る。しかも全然新しい生のものと違つて、各々其の時代に洗<sup>リフアイン</sup>練されたものであるから、落付いた垢拔のした所がある。勿論中には失敗した細部、或はもう一層よく設計される餘地ある點もあるが、それは小さな缺點である。

要するに大體に於いて斯る様式をとる事に決した正木氏と、二百分の一の圖を引いた古宇田氏の計畫と其の後の設計、監督をした鳥海氏の意匠とが、相待つて斯る面白い新建築を作り出したので、大正時代の建築史の第一頁に特記さるべきものだと思ふ。

(六月十一日)

『美術新報』第十二卷第九号。大正二年七月一日)

#### ④ 開校滿二十五年紀念式その他

大正三年四月二日、開校滿二十五年紀念の式典が行われ、併せて種々の紀念行事が催された。これは本年が本校の授業開始(明治二十年)より二十五年目に当たり、また、一連の改築工事も完成した